

年次報告等検討分科会（第23期・第1回）議事要旨

1. 日時：平成26年12月4日（木）10：00～10：45
2. 場所：6-C（2）会議室
3. 出席者：
 - 出席委員：井野瀬久美恵委員長、相原博昭副委員長、友枝敏雄幹事（Skype）
 - 欠席委員：清木元治委員
 - 事務局：吉住企画課長、吉田企画課課長補佐（総括担当）、石橋企画課
審査係長
4. 議事次第
 - (1) 役員の決定
 - (2) 外部評価委員との懇談について
 - (3) その他
5. 配布資料：
 - ・資料1 議事次第
 - ・資料2 出席者一覧
 - ・資料3 前期からの申し送り事項
 - ・資料4-1 平成26年版年次報告書（総論部分）
 - ・資料4-2 平成26年版年次報告書（各論部分）
 - ・資料5 第22期日本学術会議外部評価委員
 - ・資料6-1 平成26年版外部評価書
 - ・資料6-2 平成25年版外部評価書
 - ・資料7 外部評価委員会議事次第（案）
 - ・資料8 今後の日程について
 - ・参考1 関係規程
6. 議事概要
 - (1) 事務局より、年次報告等検討分科会の調査審議事項について説明があった。
 - (2) 互選により、井野瀬委員が委員長に選任された。また、委員の同意を得て、井野瀬委員長より、副委員長に相原委員、幹事に友枝委員がそれぞれ指名された。
 - (3) 事務局より、外部評価委員との懇談（外部評価委員会）について説明があり、外部評価委員会に備え、検討しておくべき事項について意見交換を行った上で、了承された。その概要は下記のとおり。
 - 第22期2年目の外部評価書で「学術会議が発出している多くの提言等については、残念ながら、社会に十分浸透しているとは言い難い」と指摘されていることを踏まえ、今回の外部評価委員会では、第22期3年目に発出した提言等の概要や本数だけではなく、今後、学術会議の活動が社会に浸透するために、何をしていくかについての所見も説明することが必要であ

る。

- 科学と社会委員会では、学術会議の活動が社会に見えるようにするために、2つのことを検討している。

1つ目は、チェックシートの導入である。今後は、発出前に、チェックシートを用いて、提言等の対象、提言等の内容が単なる「陳情」になっていないか、政策への反映が可能なものになっているか、内容を踏まえた標題になっているか、エビデンスはしっかりしているか等を確認し、読みやすく、社会に浸透しやすい提言等を発出できるようにしたい。

2つ目は、公表した学術会議の提言等をキーワード毎に整理し、俯瞰的に見えるようにすることである。これは、外部の方に提言等が見やすくなるだけではなく、部や委員会・分科会を超えた議論を喚起することにもつながるものである。

外部評価委員会では、こういった検討している旨、説明したい。

- 「専門のたこつぼ化」も必要であるが、各分野の横のつながりを考えていくことも必要である。提言等も、他分野に踏み込んだものは説得力が増す。査読等で何らかの対策ができないか、検討することが必要ではないか。
→ テーマの立て方を工夫すれば、他分野との相乗れも可能ではないか。例えば、高齢社会問題についても、「高齢社会の医療を考える」というテーマでは生命科学系の方しか議論に参加できないが、「高齢社会の医療を支える」というテーマなら、支え方も色々なので、他分野の方が議論に参加できる余地はあると思慮。
- 学術会議が常に抱えている問題として、提言等のインパクトをどのように強めていくかということがある。

提言等の大多数は、分野別委員会から上がってくるボトムアップのものである。学術会議はボトムアップ型の組織であるという意識はあっても良いが、「今期はこれだけはやる」という期の方針を決めた上でのトップダウン型の提言等も必要である。社会が抱える全ての問題がボトムアップだけで網羅できれば良いが、それは難しいので、執行部側で、期の活動の方針を示し、全面的にやっていくことが必要である。現在、全ての提言等が平等に扱われているが、メリハリをつけないと、いつまで経ってもインパクトは強くならない。構造化を図り、強弱をつけた方が、外部の方に伝わりやすくなるのではないか。

- (4) 事務局より、今後の予定について説明があった。
- (5) 事務局より、事務局から送付するメールの送信方法について説明があり、了承された。

以上